

「めあて(目標)とめやす」を考える

◇ 担任時代、授業ではめあて(目標)を達成させることが大事だと思っていました。そのためには「途中であきらめないで、ねばり強くやり遂げよう」とする姿勢が大切だと考えていました。子どもたちがそのような姿で取り組んでくれるような授業をしたいものだと思います。なかなかそんな授業を仕組むことができず、ついつい「もっとがんばりなさい」と意味のない励ましをしてしまう経験を積み重ねてきたものです。

子どもたちは、授業のめあての達成のためにがんばっているわけですが、その成果について「このくらいでいいや」「この程度で十分」などと妥協してしまわずに、「もっとこうしてみたい」「よりよい方法はないか」とより価値の高い方向へ進んでいくことができれば、子どもたちの自己学習力はぐんぐん伸びていくのではないかと思います。

獨協大の波多野教授は、「自己学習能力」について次のように指摘されています。

「自己学習能力」

1. 自己の理解の程度を識別し、かつそれを深めるのに適切な方略を採用する「自己制御能力(モニタリングの能力)」
2. これを支える「深く知ろうとする意欲」
3. 「自分の知的可能性についての自信」

岩波新書 『知力と学力』 P. 123 波多野誼余夫・稲垣佳世子

◇ 無我夢中で我を忘れ、時間を忘れてものごとくに熱中しやり遂げようとすることは私たちにもよくあることですが、そのような時に私たちの内には、自分の理解の程度を識別し、「〇〇のようにすればよいだろう」という「めやす」が生まれ、それに照らし合わせて適切な方略をとったりその実現に向けて苦心したりしようとする姿勢が生じます。波多野教授の「1」の考えです。そのような状況の中では、自己を客観的に見つめ自己を評価する、つまり「メタ認知」が働くと考えられます。

◇ 学校では、学習の型として授業において「めあて」を板書します。その「めあて」を見て、子どもたちは「めやす」を考えることができているか、ということを考えてみたいと思います。

日常生活の中で親が我が子に接するときには常に「めやす」を意識しています。例えば、幼い子どもをお風呂に入れているときに、多くの親は『よく体が温まるように、肩までお湯につかって100数えてみようね。』などと言いますよね。ここでの「めあて」は、「体を温めること」であり、「めやす」は「100数える間の時間」です。多くの親は、その程度の時間、お湯にゆっくり浸っていれば湯冷めしないような体の温まり方ができるだろうと思っているからそうするのでしょう。

また自動車学校では、右折や左折、縦列駐車や坂道発進など、運転の経験の浅い生徒に対してとてもわかりやすい「めやす」を示して指導してくれます。アクセルをふかしエンジンの音がこのように変わったときにサイドブレーキをはずせば、うまく坂道で発進でき

るとか、運転席から見てボンネットの一番前のラインが道路の向こう側の線にかかったときにハンドルを切れば、脱輪せずに曲がれるといった具合です。「逆戻りせずに発進」したり「脱輪せずに曲が」ったりすることが「めあて」で、「エンジンの音が変わ」ったり「道路の線に合」ったりすることが「めやす」であることはもうおわかりですね。

そう考えると、教室の子どもたちが**「めあて」だけではなく「めやす」も併せてもつ**ことができれば、子どもたちの主体的な学びにつながるだろうと考えました。この「めやす」が学習者自身の内に自ずと生じてくるようなものであれば最高ですが、小学校段階でそこまで期待するのはなかなか難しいものがあります。

- ◇ ここで、バレンタインデーに手作りのチョコレートを贈ることを例にしたものを友人に教えてもらいました。仮に「大好きな人に喜んでもらえるようなおいしい手作りのチョコレートを作って贈ろう」という「めあて」を設定したとしましょう。そうすると、私たちの内に、まず相手に喜んでもらえるようなチョコレートにするために、どんなデザインにするか、どんな味にするかなどについて工夫の観点が生じますね。チョコレートを作るための材料は何？ どうしたら作れるの？ どんなことに気をつければおいしくなるの？といった疑問を解決するための探索活動も自らの手で展開していけるでしょう。

しかも、作りながら「相手においしいと言ってもらえるようなデザインや味」を求めて、見直しや確かめの活動をしてしまうことが予想されます。舌触りのなめらかさはこの程度でどうだろうか、苦さと甘さのバランスはこれでいいだろうか、硬さ（柔らかさ）はどうだろうか、といったことについて自分の満足のみならず、相手の立場に立ってまさに問い返されながら活動を深めていくことができます。

そして、そこでは「作って贈る」という「めあて」と「おいしいと喜んでもらえるような」ものに迫る「めやす」とが不離密接な意味あるものとして、作り手に意識され作成中ずっと「問い続けられる」環境として働くことが期待できます。

- ◇ これらのことから、子どもたちが「めあて(目標)」が提示された瞬間に『こんなふうにしてみたい』とか『こういうやり方でやってみよう』というように「めやす」が持てれば、**子どもたちの主体的な学びに近づける**のではないかと考えました。しかし、先に述べたように、学習者が「目当て(目標)」に対して、そのような学習環境としての「めやす」を無理なく生じさせるには、学習者に十分な経験や積み上げが必要です。バレンタインの場合も、「バレンタインとはどういう日か」「バレンタインにはどういう風になればよいか」ということを、当事者が理解しておかないと、「めやす」なんてできません。

そこで、考えたいのが「手立てを示す」ということです。以前、ある先生が授業を提供された時、**「めあての中に手立てと学習内容があるとよい**」と言われていました。「手立てと学習内容」を示すことで、子どもたちが「めやす」を捉えやすくなるのかもしれませんが。また、手立てを示すことと同時に、**めあてをノートに写させた後、自分なりの問題解決方法をノートに書かせてみる**というのも、方法の一つなのかもしれません。

文責：スギタ